通級による指導の充実に関する研究

－通級による指導担当者と通常の学級担任との連携への取組－

みよし市立三好丘小学校　長谷川　洋子

１　実践

(1) 年間スケジュールについて

情報交換会を年間スケジュールとして取り入れるに当たり，次の２点について考慮した。１点目は，情報交換会がＰＤＣＡサイクルの機能を果たせる時期に設定すること，２点目は情報交換会のための書類作成業務が増えることによる，教師の負担感を最小限にすることである。第１回から第２回までの期間が短く，４月から取り組んでいる手だての有効性についての検証が難しいことも懸念されたが，第２回を夏季休業中に設定することで，教師が余裕をもって対象児童に向き合えることを優先した。それを基に考えた本校の年間スケジュールは次のようである（資料１）。

【資料１　通級に関する年間スケジュール（令和４年度）】

①４月当初　職員会議で情報交換会について，通級指導教室指導計画を提案
・通級による指導のねらい，支援方法について全教師で共通理解を図る。
②４月～４月中旬　個別の教育支援計画・個別の指導計画・連絡票を作成し，通級による指導を開始
・個別の教育支援計画等について，昨年度の引き継ぎ事項を参考にしながら作成する。
③４月 25 日（月）～28 日（木）　家庭訪問
・個別の教育支援計画等，保護者と合意形成を図る。
④５月 24 日（火），27 日（金）　第１回情報交換会
・４月に立てた目標，指導内容・手だてについて適切か検討する。
⑤６月 23 日（木）　第１回校内委員会
・通級による指導を受けていない児童の様子について実態把握，手だての検討をする。
⑥７月 12 日（火）～15 日（金）　個別懇談会
・通級による指導の手だてなど,改善した内容を保護者に提案し，合意形成を図る。
⑦７月中旬～８月中旬　第２回情報交換会に向けて連絡票の加筆
⑧８月 24 日（水）　第２回情報交換会
・７月までの様子を振り返り，９月以降の目標，指導内容，手だてが適切か検討する。
⑨10 月 20 日（木）　第２回校内委員会
・通級による指導を受けていない児童の様子について実態把握・手だての検討をする。
・特別支援教育が適切と考える児童，通級による指導を新規・継続希望する児童の把握・検討する。
⑩12 月 13 日（火）～16 日（金）　個別懇談会
・通級による指導の手だてなど,改善した内容を保護者に提案し，合意形成を図る。
⑪12 月 22 日（木）　第３回校内員会
・通級による指導を受けていない児童の様子について実態把握・手だての検討をする。
・特別支援教育が適切と考える児童，通級による指導を新規・継続希望する児童の把握・検討する。
⑫２月初旬～中旬　第３回情報交換会に向けて連絡票の加筆
⑬２月 15 日（水），16 日（木）　第３回情報交換会
・２月までの児童の変容や次年度への引き継ぎ内容が適切か検討する。
⑭３月初旬～中旬　個別の教育支援計画・個別の指導計画を加筆
⑮３月下旬　保護者に連絡し，引き継ぎ内容等の合意形成を図る。

(2) 情報交換マニュアル(連絡票)の活用と工夫

研究当初に使用した連絡票は，資料２である。実際に使用すると，連絡票の記入欄が多く，通級による指導を受ける児童が多い本校では，通常の学級担任の負担が大きいと感じた。そこで，連絡票の記入欄について見直すと，多くの項目が個別の指導計画（**資料３**）の内容と類似していることが分かった（**資料２**：連絡票，**資料３**：個別の指導計画のそれぞれ※１・※２・※４・※５）。

【資料２　当初情報交換会で使用した連絡票】

令和３年度　　連　絡　票

対象児童生徒のニーズ（目標としていること、困っていること）　150文字以内

※1　学級担任が記入

保護者のニーズ（目標としていること、困っていること）　150文字以内

※2　学級担任が記入

対象児童生徒が困っていることの背景として考えられること　150文字以内

※3　学級担任が記入

通常の学級での目標　※８０文字以内

※4　学級担任が記入

通常の学級における配慮事項（合理的配慮）　150文字以内

※5　学級担任が記入

通級による指導での重点目標　150文字以内

※6　通級担当が記入

通級による指導　指導内容（４～７月）	手だて	児童生徒の様子（目標に対する評価）
		５　４　３　２　１
		５　４　３　２　１

通常の学級における配慮及び変容（４～７月）　150文字以内

通級による指導　指導内容（９～３月）	手だて	児童生徒の様子（目標に対する評価）
		５　４　３　２　１
		５　４　３　２　１

通常の学級における変容（９～３月）及び次年度への引き継ぎ内容　150文字以内

【資料３　使用している個別の指導計画】

令和３年度　個別の指導計画

令和　　年　　月　　日作成

更新予定　１年後

ふりがな		学校名	みよし市立三好丘小学校	作成者	
氏　名		性　別	学　年		
		男・女	年	職　名	
保護者・本人の願い	**※1** **※2**		本年度の目標		

場面	短期の目標 **※4**	主な支援場面（担当者）	具体的支援 **※5**	評　価
学習上の支援				
生活上の支援				

次年度への引継事項		
	学習	
	生活	

そこで，情報交換会で個別の教育支援計画・個別の指導計画も活用することで，連絡票の※１・２・４・５の記入欄をなくすことにした。また，※３「対象児童が困っていることの背景として考えられること」は，児童の自立活動の内容に係る困り感であり，それについても，個別の教育支援計画の中の個人調査表に，児童の発達の様子などが詳しく書かれている。そのため，※３の記入欄をなくし，連絡票（**資料４**）のように通常の学級での目標，通級による指導での重点目標の２項目のみを記入するよう簡略化した。

【資料４　上部を簡略化した連絡票】

令和４年度　　通　級　連　絡　票

○通常の学級での目標　※８０文字以内

●通級による指導での重点目標　150文字以内

●通級による指導　指導内容（４～７月）	●手だて	●児童の様子（目標に対する評価）
		５　４　３　２　１

○通常の学級における配慮及び変容（４～７月）　150文字以内

●通級による指導　指導内容（９～３月）	●手だて	●児童の様子（目標に対する評価・引き継ぐ指導内容）
		５　４　３　２　１
		５　４　３　２　１

○通常の学級における、目標に対する配慮及び変容（９～３月）及び次年度への引き継ぎ内容　150文字以内

(3) 情報交換会の様子

ア　令和３年度　第１回情報交換会

(ｱ) 実施方法

通級による指導を受けている児童が多いため，２年生児童４名を対象に情報交換会を行った。５時間目の授業を参観し，その後，２年生の通常の学級担任３名，通級による指導担

当者，特別支援教育コーディネーター，三好特別支援学校の教師の６名で実施した。（以下，全ての情報交換会において同様の実施方法，参加者）

(ｲ) 工夫したこと

児童一人一人について，連絡票を基にしながら話す内容を決めて情報交換会を進めた。

① 通常の学級担任が「学級（集団）で困ること，指導で気を付けていること」を伝える。

② 通級による指導担当者が「通級による指導で心がけている，力を入れていること」を伝える。

③ ①②から，今後どのような指導を行っていくか検討する。

④ 三好特別支援学校の教師が，「気付いたこと（助言）」を伝える。

(ｳ) 情報交換会を終えて

情報交換会というより，特別支援学校の教師による巡回相談に近い時間となったことが反省点である。原因は，児童一人一人について，気になっていることについて全て取り上げた上で，三好特別支援学校教師から助言を受けたため時間がかかりすぎたと考えられる。２年生４名の児童の情報交換に１時間程度の時間を要した。本校は 23 名の通級による指導を受ける児童を抱えていることから，短時間で効果的に行うためには，話し合いのポイントをしぼり，より適切な指導の在り方について焦点化する必要がある。そのためにも，次回は連絡票に記載した「目標」「指導内容・手だて」が適切であるかという点にしぼり，情報交換を進めていく。また，三好特別支援学校の教師の「指導・助言」の時間は設けず，学年全員の情報交換が終わったのちに「気付いたこと・アドバイス」としての時間を設定することにした。

イ　令和３年度　第２回情報交換会

(ｱ) 実施方法

２年生児童３名（転出により１名減），５年生児童（通級による指導を受けている９名のうち）３名を対象に情報交換会を実施した。

(ｲ) 工夫したこと

連絡票を基にしながら話す内容を決めて一人５分を目安に情報交換会を進めた。情報交換会は各学年ごとに実施し，通常の学級担任全員が参加した。

① ４～７月の児童の様子，目標に対する評価を伝える。

② ①を基に９～３月の「目標」「指導内容・手だて」の設定が適切であるかという点に絞り話し合い，今後の指導について検討する。

③ 学年の対象児童全員について①②の終了後，三好特別支援学校の教師が全体を通して「気付いたこと（助言）」を各学年通常の学級担任に伝える。

(ｳ) 情報交換会を終えて

通常の学級担任も通級による指導担当者も対象児童に対しての支援の仕方で心配・不安を感じており，話したいことがたくさんあったが，内容を絞ったことで対象児童の支援の在り方について焦点化し，何から取り組むとよいかを考え，順序付けるよい機会となった。

通常の学級担任からは，学年の子どもたちについて対象児童の特性や目指したい姿をよりはっきりさせることができ，日頃から意識して関わろうと努めるようになったとの声が聞かれた。情報交換会を通して，通常の学級担任が支援の方法を変えたり，支援について意識を高めたりすることができたと考える。

ウ　令和３年度　第３回情報交換会

(ｱ) 実施方法

２年生児童３名，５年生児童９名を対象に情報交換会を実施した。

(ｲ) 工夫したこと

連絡票を基にしながら話す内容を決めて情報交換会を進めた。

① ９～３月の児童の様子，目標に対する評価を伝える。

② ①を基に次年度へ引き継ぐ「願う姿・指導内容」の設定が適切であるかという点に絞り話し合い，今後の指導について検討する。

③ 学年の対象児童全員について①②の終了後，三好特別支援学校の教師が全体を通して「気付いたこと（助言）」を各学年の通常の学級担任に伝える。

(ｳ) 情報交換会を終えて

話し合いの内容をしっかりと絞って情報交換会を重ねていることもあり，次年度への引き継ぎ内容をスムーズに共有することができた。５年生については，対象児童を９名と増やしたが，比較的落ち着いて生活できており，一人５分程度の時間でスムーズに情報交換が進んだ。助言も含め，２年生３名の情報交換に 25 分，５年生９名の情報交換に 55 分を要した。

今回の情報交換会では，新任の５年生の学級担任から学年で情報交換会を行うことで，児童の手だてや支援について共有でき，多くの目で児童を支えることができるので，心強いとの声が聞かれた。また，３回の情報交換会を行った２年生の担任からは，以下のような意見が挙がった。

- 本人の特性に合った目標かを検討することができ，安心できた。自分で考えた目標は高すぎると指摘され，修正できたことは児童にとっても，担任にとってもよかった。
- 連絡票に定期的に児童の様子や評価を記入することで，４月と比べてどのように成長したのかが一目で分かる。
- 学級での支援をフィードバックしてもらえる機会となり，励みや支えになる。次への支援にチャレンジしてみようと後押しをしてもらえたように感じる。
- 節目節目で，特別支援学校の教師から適切な助言を受けることで，これでよいと自信をもって支援にあたることができた。

どの通常の学級担任も，連絡票を使用した情報交換会での成果を感じているといえる。それは同時に，通級による指導を受けている児童へのよい支援にもつながっていると考える。

エ　令和４年度　第１回情報交換会

(ｱ) 実施方法

通級による指導を受けている全員を対象に２日に分けて情報交換会を実施した。１日目は５校時に，２日目は６校時に各学級での授業の様子を参観した。

(ｲ) 工夫したこと

個別の教育支援計画，個別の指導計画を手元に置き，簡略化した連絡票を基にしながら話す内容を決めて，情報交換会を進めた。

① ４月からの学級での児童の様子を伝える。

② ①を基に，連絡票に記載した「目標」「指導内容・手だて」の設定が適切であるかという点に絞り話し合い，今後の指導について検討する。

③ ①②の後、三好特別支援学校の教師が、各学年の通常の学級担任に「気付いたこと（助言）」を伝える。

【情報交換会の様子】

⑺ 情報交換会を終えて

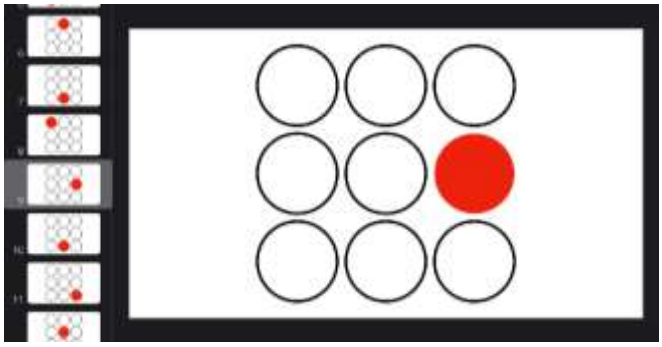
今回は通級による指導を受けている 22 名全員を対象としているため，令和３年度の取組を踏まえ，内容を絞ることで短時間で効率的な情報交換となるよう努めた。多くの児童については，目標や指導内容，手だてについて適切であるとの話し合いであったが，数名の児童について目標を設定し直したり，通級指導教室での指導内容を変更したりとよりよい指導に向けて修正することもできた。助言も含め，１日目，12 名の情報交換を 90 分間，２日目，10 名の情報交換を 55 分間で実施した。

今回の情報交換会では，目標を設定するタイミングで通常の学級担任，通級による指導担当者それぞれの立場から児童の様子を語り，目指すところを確認し合えたことがよかったという声が多く聞かれた。前年度からの引き継ぎ事項があるとはいえ，４月からの児童の様子しか知らない担任が児童の実態をつかみ，１年間の目標を立てることは難しさや適切であるかの不安があることが予想される。その点を補う面から考えてもこの時期の情報交換会は有意義であり，通常の学級担任が自信をもって支援を行うことにつながった。

⑷ 特別支援学校との連携

年間を通して三好特別支援学校の教師に情報交換会への参加を依頼した。三好特別支援学校の教師は，情報交換会に先立ち，連絡票に記入された児童の目標や指導内容，手だてと照らし合わせながら，児童の学級での様子を参観した上で各学年の情報交換会に参加した。情報交換会では，三好特別支援学校の教師から具体的な支援の在り方などアドバイスを受けた。発音が不明瞭な児童は頬が固かったり，舌の動きが悪かったりすることが考えられるので，口や舌の動きをトレーニングするとよい。物を正しく見て認識しにくい児童には，見る対象を大きくしたり，見せる量を調整して本人の負担感が減るようにしたりするとよい。体がふにゃふにゃしてしまい，じっと座っていられない児童には，力がないことが考えられるので，体幹トレーニングとともに，外遊びを推奨するとよいことなどを知ることができた。このように，情報交換会では，児童の特性や具体的な支援方法，声のかけ方などについて多くの助言を受け，通常の学級担任は，すぐに取り入れ実践することができた。また，ＩＣＴ機器を活用したビジョントレーニングや，体幹を鍛えるためのクッションなど，支援のためのサポート用具（**資料５**）の紹介もあり大変参考になった。

【資料５　ＩＣＴを活用したビジョントレーニング・体幹を鍛えるクッション】



２　実践の成果

⑴ 児童の変容

児童Ａは，体育の授業で自分の順番を守れなかったり，自分のチームに不利なことが起こると拗ねてゲームに参加しなかったりする姿が見られた。そこで、対戦相手の様子を見たり，気持ちを考えたり，ルールを守ることができるようになって欲しいと願い、カードゲームを取り入れた。その中で，①ゲー

ムは勝つときも負けるときもある，②勝てなくも怒らない，③勝った人を褒めることはすてきなことだという３点について確認した。さらに，いつも児童Ａが勝ってばかりいると一緒にゲームをしている友達がどんな気持ちになるかを一緒に考えたところ，児童Ａは，「友達は嫌な気持ちになる」ことに気付いた。そして，それが続いたら「一緒にゲームをしたり，遊んだりしたくなくなる」かもしれないことを教えた。また，なかよくゲームをするための一つの方法として，負けてしまったときに相手を褒めてあげることを紹介し，取り組んでみることを約束した。

カードゲームでの経験を重ねた結果，体育の授業でも，自分のチームが負けてしまったとき，「あと少しで勝てそうだったのに」と悔しそうにつぶやく姿も見られたが，「あのシュートはすごかった」と相手チームの友達を称賛する様子が見られるようになった。

児童Ｂは，黒板の文字をノートに書き写すことが難しく，翌日の予定を連絡帳に正しく書くことができないため、三好特別支援学校の教師からＩＣＴ機器を活用したビジョントレーニングを紹介された。これは，タブレットの画面に次々と出てくる点を，指で押さえていくもので，眼球の動きをよくするとともに，目と手の協応のトレーニングにもなる。ＩＣＴ教材を使っているので，児童もゲーム感覚で無理なく取り組むことができ，少しずつであるが，児童Ｂの眼球の動きがよくなった。

このＩＣＴ機器を活用したビジョントレーニングを継続しつつ、連絡帳の記入については，黒板に書かれた翌日の内容をタブレットで写真に撮り，連絡帳へ書き写すようにした（保護者の同意を得た上で実施）。この結果，文字の書き間違いが減り，正しく翌日の予定を書くことができるようになった。

情報交換会で通常の学級担任と通級による指導担当者が，児童の実態や目標について共通理解した。三好特別支援学校教師から的確な助言を受け，通級による指導担当者と通常の学級担任が同じ意識をもって児童の支援に当たることができた。さらに，情報交換会の場で，児童に対する支援の成果を振り返ることで，その児童が抱える困難を，主体的に改善・克服するための支援がスタートした。これは定期的に行われる情報交換会がＰＤＣＡサイクルの機能を果たしているからだといえる。

(2) 各立場から

ア　通常の学級担任の立場から

今までは紙面による情報の伝達を基本とし，必要に応じて口頭で情報交換を行っていたが，学年ごとに定期的に情報交換会を行うことで共通理解できる機会が増えた。学年の担任が参加しているので話し合う児童のイメージをもつことができ，よりよい手だてを考えることにつながった。また，情報交換を通じて，児童の状況を把握し，何から取り組むとよいのか具体的な支援の方向付けができ，目指したい姿をよりはっきりとさせ，日頃から意識して関わろうと努めるようになった。さらに，通級指導教室で行っているさまざまな支援やトレーニングの成果を学級で生かして，成功体験を積むことができるようにさせたいという気持ちを強くした。

イ　通級による指導担当者の立場から

連絡票作成時から通常の学級担任と相談することで，通級による指導担当者と通常の学級担任が目標を共有化できることがよかった。目標を共通理解していることで，情報交換の質が高まった。また，「連絡票」により話し合いの項目が整理されていたため，ポイントを絞って話し合うことにつながり，情報交換会を効率的に行うことができた。特別支援学校教師の助言は大変参考になり，情報交換会後更に具体的な課題の捉え方，取り組み方法について方向性が示されたように感じた。定期的に情報交換会が設定されているので，ＰＤＣＡのサイクルができ，評価も通常の学級担任と通級による指導担当者が協議の上で行うことになれば，次の目標も適切に設定することができるなど，より効果的な支援ができると考える。

ウ　特別支援教育コーディネーターの立場から

情報交換会を通して，通常の学級担任が通級による指導担当者と連携し，同じ指導・支援をすること，通級指導教室で児童が習得した力を学級でも発揮できるように意図的に場面設定をしていくことの大切さについて全教師の意識が高まったと感じている。双方からの支援と定期的なフィードバックで，より適切な支援ができるようにもなる。また，対象児童の支援方法について，専門家を含めた複数で検討することは，通級による指導担当者，通常の学級担任ともに自信をもって支援にあたることができるだけでなく，上手くいかないときでも，対象児童への支援内容を共通理解しているので，すぐに相談できる体制が整ったといえる。三好特別支援学校の教師からは専門的な助言だけでなく，本校の教師が，児童に寄り添い支援する姿に対して温かい言葉と評価を受けたことは，どの教師にとっても励みとなり，児童へのよりよい指導・支援につながった。

(3) 校内体制づくり

令和２年度は，通級による指導担当者は他校との兼務であったため，週に 3.5 日の本校勤務であったが，令和３年度から他校との兼務はなくなり，毎日本校に勤務となった。以前から，校内委員会などの各種会議にも参加していたが，通級による指導担当者と通常の学級担任が情報交換の時間をより取れるようになった。また，席を職員室の中央付近に配置することで，通級による指導担当者と通常の学級担任の双方から声がかけやすく，相談しやすい環境となった。情報交換会だけでなく，日頃から情報共有したり，話し合ったりすることで対象児童の支援について適宜修正，追加したりすることができた。この修正，追加は小さなものではあるが，積み重ねることで児童にとっての大きな支援となっただけでなく，通常の学級担任の意識改革にもつながったと感じている。

１年に３回行う情報交換会で通級による指導を受けている児童について検討を行うことができるようになったため，校内委員会では通級による指導を受けている児童への検討を省略し，紙面による情報共有だけにした。その結果，検討が必要な児童について十分な時間を取り，適切な支援を考えることができる体制となった。

４　今後の課題

「連絡票」を一部簡略化したが，やはり新たに書類を作成することは負担が大きい。個別の教育支援計画・個別の指導計画とリンクさせるなどして効率的に作成でき，かつ有効活用できるような連絡票にしていきたい。また、通級による指導を受けている児童が多いため，情報交換会での児童一人当たりの時間を５分とし、さらに，検討事項をあらかじめ絞るようにしたとはいえ，やはり時間が足りない。目標や児童の困り感に対する手だて，支援方法の引き出しを多くもつことが必要だと感じた。その点からも，特別支援学校教師の専門的な助言は必要不可欠で，今後も連携していける体制を整えていきたい。